平成 20 年度　8020 公募研究報告書抄録

研究課題：糖尿病患者の歯周治療指針の確立を目指す前向き研究　～Hiroshima Study～

研究者名：森田知夫[1)]、西村英紀[2)]
所　　属：[1)] 広島県歯科医師会、
[2)] 広島大学大学院医歯薬学総合研究科顎口腔頚部医科学講座健康増進歯学分野

【目的】

歯周病は糖尿病や肥満といったメタボリックシンドロームの合併症として捉えられつつある。一方こうして発症した重度の歯周病は逆に軽微な慢性炎症として糖尿病の血糖コントロールに負の影響を及ぼす可能性が示唆されている。この関連性を一層明らかにすることは歯科医療の価値をさらに押し上げるものと期待される。

しかしながら、①どのような糖尿病患者を標的として、②どのような時期に、③どういった歯周病治療を施すことが血糖コントロール改善に寄与するのかについては不明な点が多い。糖尿病患者の多くは地域の糖尿病専門医あるいは中核病院において管理を受けている。したがって単一の施設においてこの課題に取り組むことは費用対効果の面から無駄が多い。そこで、各専門医や中核病院において管理を受けている糖尿病患者を地域歯科医師会会員に病診連携事業の一環として紹介してもらい、口腔内診査を行ったうえで、重度の歯周病が発見された患者に対して血糖コントロール改善を目的とした抗菌的歯周病治療を施し、その効果を評価することを計画した。これにより糖尿病患者に対する有効な歯周病治療指針の確立を目指すのが本調査の目的である。

【対象および方法】

糖尿病専門医・中核病院において管理を受けている糖尿病患者で以下の条件に合致する患者の紹介を受ける。①2 型糖尿病　②BMI が 30kg/m^{2}以下　③過去 3 ヶ月以内に歯科治療を受けていない　④1 ヶ月以内に抗生剤の投与を受けていない　⑤妊娠糖尿病、ステロイド投与中、急性期疾患患者でない

紹介された患者に対して歯周病診査を行い、重度の歯周病でありさらに炎症マーカーが上昇している患者を被験者とする。被験者には同意を得る。重度歯周炎患者とは、①残存歯が 10 歯以上で平均骨吸収率が 50%を超え、②高感度 CRP 値が 1000ng/ml を超えているもの　とし、この条件に満たないものはコントロールとする。

被験者には対しては抗菌剤（ペリオクリン）を用いた抗菌的歯周治療を行う。歯周基本治療はおおむね 1 ヶ月程度とする。コントロールに対しては、一般の歯周治療を行う。治療開始後、1，2，3，6ヶ月目に糖尿病専門医・中核病院において血糖コントロール改善効果の判定を行う。同時に炎症マーカーの低下度、インスリン抵抗性改善度に関しても判定する。ポケット残存患者に対しては歯周外科処置を、一方基本治療で充分な効果が得られた患者に対しては supportive therapy を行う。

【結果】

まず広島県尾道市において先行調査を行った。その結果は、平成 20 年 3 月から 9 月までに医科から紹介された糖尿病患者数は 47 名であり、男性 25 名、女性 22 名であった。このうち調査の被験者は 4 名、コントロール 9 名、未定 2 名で、残りのうち 32 名は除外となった。除外理由は、骨吸収率不足 16 名、非同意 5 名、残存歯数不足 4 名、その他 7 名であった。被験者について、抗菌剤を用いた歯周治療を行った結果、炎症マーカーである高感度 CRP は 1000ng/ml 以下まで急激に減少した。これに対し糖尿病の指標である HbA1c は、治療開始直 1 ヶ月後より減少し始め、3～6 ヶ月までに 0.5～2.0 ポイント低下した。これに対し、コントロール群は、高感度 CRP、HbA1c とも、大きな変化は見られなかった。また除外となった患者の HbA1c も、歯周治療後には平均 0.3 ポイント減少した。

【考察】

今回、糖尿病患者の歯周病治療指針の確立を目指した介入調査事業を開始し、抗菌剤を用いた歯周治療の有効性が示唆されたが、被験者の条件が厳しく紹介者の約 1 割しか該当しなかった。また糖尿病患者特有の動態もあり、今後はさらに広域での調査を行い例数を増やす必要があると思われる。また本研究は、地域における医科歯科連携および患者啓発という面からも、歯科にとって有益なものと思われ、今後さらに展開して行く意義があると考える。